

沖

昭和45年創刊 平成27年4月1日発行(毎月一回一日発行) 俳句雑誌 沖 第16巻第1号

4

俳句雑誌[おき]



蛇口の水

能村 研三

俳壇交流

寒行や経の仕舞の荒び声
追儺会や切火開きのご尊顔

場違ひな遊び着二月礼者かな

褒言葉真に受けてをり魚は氷に

沖の人たちは余り俳壇との交流に積極的ではないのが残念である。いろいろ忙しく自分の結社の句会で精一杯という方もおられるが、他結社の方々や、中央俳壇で活躍する著名な俳人と時折お話をしてみるのも大切なことであると思うのだが。年に何回か開催される、総合誌主催の新年会や各賞授賞式にも、最近是我の他千田百里同人会長と二、三人の方が来られるのみ。各種の全国俳句大会への参加も消極的である。

昨年は、「萬緑」の方々と合同句会を開催したことも記憶に新しいが、日常とは違ったカルチャーショックがあつて楽しい会となつた。

本年から私も俳人協会の役員を担当することになったが、これからは俳人協会の諸行事にも積極的に参加して俳壇との交流を図っていただきたいと願う次第である。

とんとんと紙嵩揃へあたたかし

うまい話乗つてはならぬ目刺焼く

納税期蛇口の水の気負ひすぎ

つくば学園都市

春秋の手で触れてみるゆるぎ石

科学都市春夕暮れの黄ばみあり

私を包んでもらふ石鱈玉

俳壇といっても、全国的な規模であるものから、地方独自性のものなど多種多彩であるが、私も時間の許す限り、いろいろな場で俳壇交流を深めていきたいと思っている。

先師登四郎も若い時は、現代俳句協会の幹事などの仕事で俳壇との付き合いも積極的で、総合誌主催の新年会には出来る限り顔を出して、て、その頃は先師を囲むように弟子たちも多く参加してくれた。そうしたお付き合いがあつてこそ、自分の結社の周年行事などにも俳壇から応援を頂けたと思う。

本年は「沖」は創刊四十五周年の節目の年ともなるので、俳壇を広く見渡した中で「沖」がどうあるべきかを皆で考える良い機会になるのではと思つている。

秋の記念大会には俳壇から多くの諸先生がお祝いにかけつけて下さることになつていたので、今からでもその雰囲気慣れ親しんで頂ければ幸いである。

蒼茫集



寒 星

大畑善昭

寒星のぴしぴし赤子眠る家
貂跳んで一目散の景緊まる
雪に足取られとつさに出る受身
雪間草川沿ひに家点在し
死はそばにつつしみ深くゐる余寒
壁を這ふ枯蔦の脈人体図

冬の泉

辻美奈子

てのひらを冬の泉がつつみをり
極光波打つ大寒のまなうらに
雪しまき我が身わづかに尾を引けり
料峭や真珠は内部より光り

春愁しるきごろごろとコブサラダ
遠足の子らが一粒づつ光る

忌を重ね

千田

敬

冬の日の断片を浮かべ二人棲み
冬の魃武ちやんマンの忌を重ね
北窓ひらく詩ごころ開かむと
梅一輪二輪三輪八十路とな
一幹のちからと対峙梅白し
昨夜の風紋記録して薄氷に

湯 気

安居正浩

豆撒いてみても他人のやうな闇
雪晴や温泉まんぢゅう湯気で売る

鶴引きしあと青空の呆けやう
断崖の裾を騒がせ波の華
墓建てて春はそこまで来てをりぬ
京菓子の薄くれなゐに春の雪

風 骨 千 田 百 里

眠る山越すな抱かる火口はも
久女忌の何も言はざる一冬木
風骨は継ぐべし春の泥跳ぶべし
ふらここに揺られて遠き日をゆらす
縊るるとも翻るるとも春の滝
利久忌や吹けば燠火の蘇り

約ひとつ 甲 州 千 草

口数を足せば足されて温め酒
電車には蛇腹の継目雪しんしん
叶ふなら冬芽の芯に籠りたし
立春の握手にて成る約ひとつ

組まれたる足少し邪魔春愁
後列はタンバリン打つ地虫出づ

濁 世 宮 内 と し 子

白といふ色の発光大根干す
蔵元の深井より汲む寒の水
諦める決断薄氷踏んでから
ビル街の死角にひそと午祭
一齐に濁世にもどる福の豆
春浅しくるくる解きてハムの糸

はるかより 田 所 節 子

月光の鋭さ霜を育てをり
日脚伸びおまけのやうな時間かな
白鳥の首は縦笛呼び合へり
工事堀囲ひのおぼろ駅通路
寝つかれぬ夜ははるかより亀鳴けり
星空へ行く春灯のエレベーター

考への指 藤森すみれ

この里の星に預けて寒天干す
考への指組みほぐす冬木の芽
チエーンソー冬青草を目覚めさす
手袋を脱ぎ湖風に深呼吸吸
雪解の始まる水音棚田晴
御柱となる樹ならぬ樹根開きせり

日 矢 荒井千佐代

避寒して小さき鍋釜使ひけり
鬼やらふ宵の船笛定効に
鮮やかにちちははのこと梅真白
雛流す川に山影濃くありぬ
桃の日のさざ波美しき被爆川
すぐそこの島に日矢射す雛納め

桃の花 広渡敬一雄

猿山に岩峰ふたつ日脚伸ぶ
如月や刃物を研ぐに胡坐よし

啓蟄や母校を映す水たまり
漆黒の切符の裏や三鬼の忌
屏風絵に楽市楽座桃の花
春月やパスタをさまる銀の匙

寒牡丹 梅村すみを

威勢よき声寒風の魚市場
鉢巻の河原に整列寒稽古
ぬめり佳き千枚漬の薄さかな
凍てしまま洗濯ものの乾きをり
箒目の乱れもあらず寒牡丹
臘梅へ蜜のやうなる日差かな

春北風 吉田政江

煮凝や直言にあるほろ苦さ
やさしさは霜の柱のほぐれほど
霜くすべ囀歌の里の目覚めかな
春曙スクランブルエッグ二人分
筑波嶺のまだ容赦なき春北風
山の端へ日差しを還し獵期果つ

握り語り

渡部節郎

小春日や握り語りと言ふ看取り
冬の海波・浪・濤の高さかな
大仏の肩より弾け寒雀
白梅の薄くれなゐの蕾かな
水門は玄関口や浅蜷舟
人の世を丸く映してしやぼん玉

父の座

森岡正作

七曲りして一つある七福神
父の座の軽さうべなふ寒卵
巢はすでに趨勢知つてをり
勤行の水より剥がす薄氷
走るものみな春光にまみれ来る
日本は富士に統べらる菜の花忌

連写音

菅谷たけし

寒晴や等間隔の着陸機
蹟踏なく河豚刺崩す妻の箸
発砲のごと白鳥へ連写音

牛小屋も柵挿して回りけり
霜柱強気を崩してはならじ
街角の少女のオブリジェ春めけり

備蓄庫

成宮紀代子

手拭を使ふ体操鳥雲に
春愁やエレベーターにある鏡
墓碑に名の多き一族風光る
料峭の紙鍋の炎の揃ひけり
烏曇隣の人の住み替はり
町なかに備蓄庫しんとよなぐもり

春禽

高橋あさの

人形のふとまばたきぬ雪解風
寒木瓜の思ひつめたる開きやう
風花や気づまりな用一つ終へ
桐の木のおつと匂へる雨水かな
風光る単線にある待時間
春禽の陽をころがせる枝移り

潮鳴集



五感打つ

内山花葉

大砲めく望遠レンズ瑠璃鶺鴒
火打石荒行堂の寒払ふ
寒行の気迫はつしと五感打つ
木鉦の一心揃ふ節分会
古木梅に万奮の艶満願す

一 瞬

七田文子

着ぶくれてそしてとつても地獄耳
笛子鳴くさはれさうなる距離なれど
ビル間に電車一瞬春うごく
縦横に鉄道巡る蝌蚪の国
ふらここに揺るる心のゆるるまで

歓喜の風

今瀬一博

凍瀧を歓喜の風の過ぎゆけり
嘘ならば美しくつけ冬の薔薇
身を離れ鋭利なる爪春隣
待春のほのあたたかきマドレーヌ
梅咲くや日当りのよき洗車場

診察室

高木嘉久

廃校は免れ山の深眠り
咳止まる診察室に入りてより
クレーンが雲をなぞりて雪催
雪霏々とテレビ画面を縮こませ
スニーカーの春を探してゐる速度

沖作品



能村研三選

雪漕いで来る朝刊の重大事

北海道

頼田 幸子

ひとつねり独楽に命の生まれけり

東京

山下ひろみ

軒つらち家族のやうに生れにけり
日脚伸ぶ一日一日の身軽さよ
追儼豆八十粒のあるがまま
立春やひと声零し鷺の空

千葉

塩野谷慎吾

天帝を突き上ぐ風の糸放る
境目のなき蒼穹や冬に入る
鉄鍋の煙もろとも猪食らふ
初明り隅田に架かる十の橋
あの頃と云へば戦中葱雑炊

福島

佐川三枝子

凍雲の隙間に日矢の差しにけり
雪の降る静かな音に目覚めけり
音立てて橋桁洗ふ雪解川
城址の空堀埋めて下萌ゆる
春寒や使はぬ部屋の掛時計
寒牡丹菰より歩き出でさうな
雪景色鉛筆一本あれば描く
堂内を揺るがす調経^{ふきん}追儼寺
豊満な裸弁天春寒し
古希すぎて描く未来図山笑ふ

岡 真紗子

真夜響く雪折れ杉のいのちの音
鳥声やしづれの音の絶えしとき
四温光会津小法師の糸瞼
縄文の大地の記憶霜柱
勾玉や太古の真と雪野原
寡黙いま冬樹の影に立ちてをり
冬深む五百羅漢の肋骨
枯葉舞ふ山廬は詩の石畳

神奈川

小林 和世

沖作品 15句選評

*
能村研三

雪 漕 い で 来 る 朝 刊 の 重 大 事 頼 田 幸 子

都会暮らしをしている私たちには豪雪地帯の暮らしぶりは想像し難いものがあるが、毎日一軒一軒に朝刊を届ける新聞配達の方々はどのようにしているのだろう。バイクや自転車などを使うわけにもいかず、おそらくは新聞を小脇にかかえ雪を掻き分けながら配達するのであろう。ある意味では命がけの仕事で強い使命感がなくては出来ない仕事だ。二月の始めにイスラム過激派組織による衝撃的なニュースが世界を駆け巡った。日本中の人々が固唾を呑んで無事を祈っていただけに悲しい出来事であった。頼田さんは北海道にお住いの方で、冬は厳しい雪国の生活が強いられるが、「雪漕いでくる」という表現に重大事をいち早く伝えなければならぬ切迫感が感じられる。

雪の降る静かな音に目覚めけり 塩野谷慎吾

雪が降りつもると不思議と外の音が静かになる。音は物が震えて発生し、その震えが空気を振動させ、鼓膜に届くことで聞こえる。しかし、雪が降っていると空気の振動を吸収してしまいうので、音が遠くまで届き難くなり静まり返ったように感じる。雪が音を吸収するのは、雪の結晶に小さな隙間がいくつもあるので、そこに音が閉じこめられてしまうからだそうだ。雪がしんしん降り積もりいつもより静かな朝であるが、雪明りが眩しく心地よく目覚めることが出来た。

雪 景 色 鉛 筆 一 本 あ れ ば 描 く 岡 真 紗 子

絵のことは詳しくはわからないが、水彩や油絵ではなくて単色の鉛筆一本で絵を画く「鉛筆画」であろうか。雪景色は確かに単色の世界だが、鉛筆の黒の濃淡と余白の白さだけでものを表現するのは難しい。俳句もある意味では非常に短い詩形の中で、ものを表現する窮屈さがあるが、鉛筆画も制約された中でものを表現する難しさがあるからこそ面白いのかも知れない。

ひ とう ね り 独 楽 に 命 の 生 ま れ け り 山 下 ひ ろ み

正月の遊びの一つに「独楽回し」がある。独楽は軸足が一本なので、本来であれば倒れてしまうところだが、上手くスナツプを効かせて投げることで回転による遠心力が生じ、軸をぶれさせることなく、倒れず回り続ける。これを作者はひとうねりすることで、勢いよく廻る独楽は少しもぶれることなく独楽に新たな命が生まれる瞬間を見たのだ。(以下略)